

「同経遠位穴による視力回復の効果」

2000年(社)全日本鍼灸学会神戸大会発表

《はじめに》

近年、テレビゲームの普及にともなって学童児の視力低下が年々進んでいて、小学生では4人にひとり、中学生では半数が1.0未満の正常視力以下となってきている。

視力回復に関しては、眼科医のなかでも、それを可能とみる医師と不可能とみる医師に意見がわかれているが、一般的には近視を治療対象外として、すぐにメガネ・コンタクトをすすめる所が多い。あるいは、散瞳剤を使うこともあるが、アトロピン等の散瞳剤のなかには眼圧上昇や毛様体筋萎縮を起こす危険もあることが報告されている。このような中で、薬物療法のように副作用がない鍼灸治療はさらに注目されていい治療法である。

さて今まで、鍼灸治療によって視力が回復した例がいくつか報告されている。その多くが目の周囲のツボを中心として使用したものであった。今回は目の周囲のツボは使用せずに、視力の回復の可能性について考えてみることにした。



《目的》

吉川正子(北海道)は96年のニューヨーク鍼灸学会において、「弁証論治の応用による眼科治療の標準化作業」と題し、1000眼の視力回復例について報告(平均で0.36の視力向上を認めた)しているが、その中で目の周囲のツボの同経遠位穴の有用性についても述べられていた。今回はそれを一部追試する形で、同じように自己の臨床の中から、400人・780眼の視力回復について分析し、その効果の検討を試みた。

《方法》

対象は1991年から2000年4月までの9年間で、視力回復を目的に当院に治療にきて、10回の治療をしたすべての400人(男174名、女226名。4歳から76歳、平均年齢は19.7歳)。対象眼は0.01から0.9の視力範囲で正常視力以下とした。そのため対象眼は780眼とした。

新和精工製電光投影式視力検査機 SK-8A を使用し、治療前後に視力を測定した。屈折度測定はしていないので、近視の程度は不明であることを明らかにしておく。なお、近視の程度は、-3D 以下を軽度近視(視力 0.1 前後)、-3D から-6D を中等度近視(視力 0.04 から 0.1 前後)、-6D 以上を高度近視(視力 0.04 未満)と分類されている。それに照らし合わせると 今回の対象者は、軽度近視 572 眼・73%、中等度近視 119 眼・15%、高度近視 89 眼・12%の割合であった。また臨床上の区分になりやすい分類として、0.1 未満が 212 眼で 27%、0.1 から 0.4 が 476 眼で 61%、0.5 から 0.9 が 92 眼で 12% となっている。

治療は目の周囲の圧痛点を捜し、その同じ経絡上の反応点に刺鍼。さらに 全体療法も重要なので、腹部と背部の圧痛も調べ、治療点に刺鍼し、圧痛を取り除く。目は肝と関係が深いので、肝経は特に注意してみる。

鍼はセイリン社製 40 ミリ・16 号鍼(1 寸 3 分-1 番)を使用。横刺で 浅刺。20 分間の置鍼。また補助的に耳穴圧迫法(目 1、目 2、眼点、神門に王不留行の種を貼る)、温灸治療(腹部の反応点に 15 分)をし、さらに目の体操を 1 日 3 回するよう に指導。一週間に 2 回から 4 回の間隔で治療し、10 回の治療を 1クールとする。視力は必ず治療前後に測定し経過を観察した。

《結果》

1クール後の視力は、

変化なし	46 例	6%	(無効)
0.1 向上	135 例	17%	(微効)
0.2~0.4 向上	481 例	62%	(有効)
0.5 以上向上	118 例	15%	(著効)

有効と著効を合わせると 77%。平均では 0.28 の回復。

また、治療前と治療後の視力変化をt検定をして、統計処理すると、有意水準 0.5%で、治療開始時視力 0.22 から治療終了時視力 0.44 に、平均で 0.22 の視力向上を認めた。

《考察》

この結果により、吉川の報告にあった弁証論治を基本にして 遠位穴を使用した治療法には、視力の回復に一定の効果があることが、確認できたと思う。

目の周囲に刺鍼するのは、顔面内出血の危険性があり、またなんとなく恐怖感を与えるものだが、遠位穴を使用した場合にはそれがないので、小さな子供にも抵抗なく治療ができるという利点がある。

また治療後の視力は、家庭での目の体操とローラー鍼でのツボ刺激を継続することによって、半年から8年ぐらいにわたり維持されていることが多い。

(一部抜粋。この論文の無断転載を禁じます)